

# おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成18年  
1月号

毎月23日発行  
通巻425号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成18年1月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷株式会社  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



寒梅 福井市 齋藤正宏さん撮影

## 昭和37年1月23日 月次祭法話より 年の初めにあたり

法主 矢追 日聖 (51歳)

### 一年の計を立てる

今日は、昭和三十七年における初めての月次祭です。雪花が散って、まことに冬らしい感じがいたします。

年の初めに毎年申し上げることであり、一年の計は元旦にあるとか、一日の計は朝にあるというように、物事の始めの時に、自分の考え方をまず持つということをしなければいけません。

今年世間一般の考え方から見れば、経済方面や何かにつけて芳しくない動きがあります。けれども、人間の幸、不幸というものは、大して関係がないのです。自分たちの人生の歩み方によって幸福とか不幸とか言えるのであって、ただ金銭、衣食住といった物質面だけにおいて決まるものではないんですね。

私も元旦に、色々に当たる面がございましたが、それは難しいことではなく、今年一年間はどういう方向に持つて行くという考え方です。毎年考えることですが、とにかく今年もまじめに生きさせてもらおうということなんです。

非常に簡単な言い方ですけれど、素直な気持ちで、神さんのご意思のままというような意味なんです。所謂、「かんながら」ですね。

けれども、まじめに過ごさせて貰えませうにと、神さんをお願いしたのではないですよ。自分がまじめに、神さんのご意思に沿って過ごします、それを神さん見ておって下さいという気持ちでお祈

りしたわけです。

皆さんも年の初めには皆さんの前で、お誓いを立てておられることでしょう。中には金が儲かるようにとか、病気が治るようになるとか、あるいはただ漠然と今年一年幸せに暮らせるようになると願うかけ、こうしてください、ああしてほしいと銘々勝手なことを祈っておられるかもしれない。それが世の大多数でありますけれど、私は生まれてから今日まで、皆さんに対して人間の勝手なお願いということをしたことがないんです。

皆さんにお祈りするということは、即ち自分の心に誓うということでもあります。仮に健康で一生いたければ皆さんにしてみらうのではなく、健康を保つように自分で自分の体気をつけ守っていくんです。商売でもしてお金が儲かるようにと皆さんにお願いする前に、自分の能力においてどういうような方法でいけばお金は儲かってくるかと考えたらいんです。儲けが薄ければ無駄遣いをせず節約するような方法を取り、所帯のやり方を考えたり自分の収入と支出を睨み合わせて皆自分自身でうまくやっていく。

皆さんにご祈願するという気持ちがあれば、自分の心に向かってそれを言えばいいんです。自分という能力範囲において自分でやるんですから、皆さんがするんじゃないんです。私も常に皆さんに合掌し拜んでおるんですが、皆さんに願をかけてことがないというのはそういう意味です。

皆さんというものは、一つの理想の世界というような非常に高いところにおられます。皆さんを高い位置において、我々人間が近づくと努力をするために、下から手を合わせ合掌するという形になります。我々人間から見ると一つの目標であり尊敬すべきものです。

皆さんにすがり付いて力を借りるといような

考え方は間違っているんです。神様は敬うべきもの、尊ぶべきものであって、頼るべきものではないんです。頼るのは自分の心、自分の精神、自分の信念でなければいけないんです。

だから我々が長生きしたいからといって、皆さんにどれだけ願をかけても、自分の肉体の限界がくれば死んでいくことは、「かんながら」で決まっております。死ぬまでの間、健康を保つていくということとは、自分の心にしよちゅう鞭打ち、自分の体に気をつけようとするということです。

また自分の生活が非常に苦しくなってきたからといって、どれだけ皆さんにお賽銭を供えて、お百度を踏んで拜んだところで、皆さんは日本銀行を経営しているんじゃないですからお金は持つてきてくれない。お金を生み出すのは自分であり自分の肉体であるんですね。自分自身の欠点があったり、考え方に間違いがあるからうまくいかない場合が出てくるんです。

年の初めにおいて一番先に念頭においてもらうことは、神様というものは崇高な理想の世界にあって我々が尊敬すべきものであり、力を借りたりするべきものではないということです。それをも、よく認識してほしいのです。

今までのような信仰のあり方では、自分さえよければいい、自分の家族だけがうまくいけばいいという利己的で公益主義的なものです。神様に欲を持って願をかけることは、神様の世界から見れば、もつとも汚い世界ですね。それが今日まで正しい信仰の姿だと考えられてきました。

「叶わぬ時の神頼み」という諺のように、叶わぬ時には神さんに頼つたらいい、すがればいいという所謂、他力本願と言いますか、人のふんどしで相撲をとるような卑怯な考えは神さんにも通用しないんです。そういう考え方をこの際、改めな

ければいけない。そういった認識をあらたにしてこそ本當の宗教、宗教心というものが湧いてくるんです。

## 喜びを持つた人生

我々は社会の中に生きさせてもらっているんですから、やはり自分だけが幸せになつて他人が不幸になつた場合には、自分もまた不幸になつていくんですよ。これはいつも言うことで皆さんの耳にはたこになつていくかもしれないませんが、社会全体が幸せにならなければ自分の幸せというものはありません。

その幸せということは、十人十色であつて、その人その人によるところの主観的なものでありますから、全部違つております。幸福はよそから持つてくるものでもなし、拾つてくるものでもなし、自分の心の中に湧いてくるものなんです。ですから十人十色、百人百色のこの社会でそれぞれが何かの喜びを持つて暮らすことができるんです。

幸福という言葉を使い換えれば、喜びを持つて暮らせる人生ということです。

その時に、一時的な幸福というものではなくあるんですよ。落としたお金さえ出てくれば幸せだと思つても、結局出てくればその幸福は消えてしまふ。あの人と夫婦になれたら幸せだと思つても、結婚したら夫婦喧嘩をする。これも一時的な幸福感ですね。

しかしながら、永遠の幸福というものはない。うものとはまた違います。生まれて物心ついて死ぬまでの間、喜びを持つて暮らせる人生が、本當の幸福だと思います。

我々人間が、社会の中において暮らしておるといことは、例えば私が着ているこの衣類一つと

つてもわかりません。どこかの国で羊を飼い毛を刈つてくれ、それを織って染め生地をこしらえてくれというように、世間の人が作ってくれたものです。それがためにお金を出して買うことができるのです。買えば自分のものだと思っていますが、本当は自分のものではないんです。

自分のものだと思っている自分の体、肉体そのものでも、最後は土の中に入って植木の肥えになってしまふ。あるいは火葬場で焼けば煙となって消えてしまふ。自分のものだと思っている自分の肉体ですら自分の思うままにはなりません。

このように人生というのは一面、はかないものだと言えます。所謂、諸行無常のその中に、今日の私、昨日の私と、そして明日の私とはまた変わっているんです。常に変化の歴史を辿っており、変化しながら墓に近づいています。

その中において一日一日喜びを持って暮らす人生観があれば、本当に幸せだと言えるのです。そこには物質生活だけではない、精神生活が伴っていないければならないんです。

## 顕幽不二の原則

大倭の教えの中にありますように、顕幽は不二であります。形のある肉体も、姿の見えない心も精神も、一つのものであり二つのものでない。二つのように見えるけれども一つのものなんです。顕幽という見えるものと見えないものが一つのものであるというのが大倭の原則です。

私たちは自分の肉体だと思っているけれども、自分のものではない。勿論住んでいる家も、働いて得たお金も全部自分のものではない。仏教ではこうした世界のことを空即色と言います。色というのは体や家、お金、山、川など形のあるもの

を言っており、それらは空、何もないのと同じであるという意味です。

自分のものだと今思っていますが、自分のものではない。自分のものではないけれども、今自分のものになっていくんですね。それは生きておる間だけ自分のものだと思っただけなんです。自分の思いだけで我がものではない、一切仮のものなんです。

そういうようなことを考えてくると世の中、苦しいもの、苦しみというものがだんだん少なくなってきました。

皆お金を儲けるために苦労したりしますけれども、世間並みの生活しうだけの余裕さえあるならそれで結構ですね。生活するためには苦労しなくても、これは神さんから見れば本当の苦労ではないんです。

我々が神の定め、天の定めとしてこうして生かされておる以上は、肉体、命がある限り生きていかなければいけない、一つの宿命があるのです。私たちが生きていくために働くということを、苦労だとか苦痛だとか言うのと、神さんに叱られるんです。それが苦であると言うのは、あまりにも欲が深すぎるからなんです。

そのように物事を考えてみれば、自分がどれだけお金を儲けても、どんな立派な家に住んでも、死ぬ時にはすべてこの世の中に置いていくんです。置いていくと考えれば馬鹿くさくさってね、人を泣かしたりかっぱらったり、余計なことまでしてお金を残そうという気持ちに、どうしてなるのだろうかと思えてくる。何とか三度の食事を食べさせてもらえばそれで結構なんだと、足るを知る人間になってくる。

この足るを知っているのが、非常に幸福な人間だということであります。私はそうした人間とし

ての生活面において、今のところもう何一つ不自由も苦痛もありません。

けれども、私には役目というものがありません。世の中の人たちが何故宗教心を持つことができるのか。どのようにすれば社会の人が宗教心を持ち、お互い結びあうような美しい社会が、この地上に出来上がってくるだろうか、そのことについて私は悩みます。仮に私があと十年、あるいは二十年の短期間の命の間に、例えば少しでも、そういう社会が生まれてくる足場だけでも作れたらと思ひ、そこに私の幸福があり喜びがあります。

## 社会の雛形としての存在

しかし今のようなご時世においてこれは中々の大問題で、皆が宗教心を持ち、お互いに喜び合う社会を作り、喜び合う人生を持たすことができるかという方法論について私は悩むのです。これは私の苦痛なんです。おそらく死ぬまで続くかと思ひます。所謂、菩薩の悩みとして、死後の世界に行っても罪にはならないと思っておりますが、自分の息のある間に何とか形にしなければいけないと、常に考えています。

その雛形として大本宮に、大倭の一門において、理想とする社会の縮図を作っておるんですね。大倭の一門と言っても年寄りから赤ん坊まで三十人余りがいます。年齢の差があり、男も女もおり、色々な性格の者も、色々な体質の者もおります。今三十人余りが十年後は五十人になり、あるいは百人になるかもしれません。そういう時代がきても、平和な、お互い喜び合っただけで暮らせるような、そんな社会の縮図を作っておるんです。今現在の状況を見ました時、まだまだ完成の域には達せず、中途半端でどちらに転ぶかはわかりません。

けれども、出発した当初から比べ格段の進歩があり、だんだんと堅実に固まってきており、理想の世界に一步一步近づいてきておると思い、私は非常に喜びを持っています。

大倭の一門が社会の雛形としての存在なんですから、お互いにどうすればいい、こうすればいいと考えて生活することは、小さく見えますが、大きな問題なんです。

人々を幸福に導いていこうと、我々と同じような考え方が今、世界中から生まれてきています。共産主義、社会主義的な考え方、また国家主義的な考え方と色々あり、今の日本は敗戦後、欧米の民主主義によって動いています。民主主義というものが本当に幸せに暮らせる主義であるかどうかということは、まだ誰にもわかりません。あるいは日本の在来の家族主義はどうかというように、幸福な社会を作っていくという目的は同じですが、その方法において色々あるんですね。

世界の大問題であります。我々大倭は理屈より何よりも、ここに集まって現実の社会を今建設しているんです。この方が世界の主義者よりも一歩前進していると私は思っています。ただ机の上において共産主義はどうだ社会主義はどうだと、口では総論を述べますが、例えば二十人、三十人でもそれに基づいた社会を作った試しは少ない。ソビエトは今、社会主義の国ですが、あれは武力や権力によって、否応なしに国家が成り立っているんです。日本の昔の国家主義も変わりません。こういう方法でいけば幸せになるんだと、皆がこぞって喜んで作ったところの社会でなければいけないんです。権力や武力で押し付け、型にはめた社会では、いつまでたっても幸福な社会とは言えません。

ここに大倭は、大倭教という宗教的な教えに基

づいて、お互いに精神的にも訓練をしていくんです。顕幽不二なんです。形のある肉体を持った物質生活の面と、お互いに心と心を融和したところの精神生活の面と、この裏と表の両方が相一致した社会……ただ表の形だけでなく心の中も融和した、物質生活と精神生活の両面がバランスのとれた大家族を作っていくようにしています。

そういう大枠は決まっていますが、些細な細部にわたっての問題はまだ考えなければなりません。これはこれから伸びていくところの大倭の若人によって、一步一步堅実に形成していくだろうと思っっています。

大倭の社会において頭の位置の者もおればまた足の者もあり、手もあれば腹もある。縦の関係においてそうした形をとっておりますけれども、これは「かんながら」の姿なんです。

形の上からみれば差別のように見えますが、「かんながら」というものは、我々の肉体を見ればすぐにわかります。形としては頭と足、腹と手という縦の順序が厳然として出来てこなければいけない。

家族も一つの体として見れば、その中にはまた、頭から足先まで通っている血液があります。口から入った食べ物によって、足の先まで栄養を送り、肉をつけ熱も送っていくというように、体内において一貫した差別のない血液が循環しておるんです。大倭一門という形に、頭もあれば足もあるとしながらも、見えない裏の精神生活の面においては、一律平等な幸福感を得るといふ血液が循環しておることを、今後、若いものが忘れないでよく心得てほしいと思います。

大倭は言わば、世界平和の雛形を作り上げ、これこそ世界に出しても間違いない、実験済みの社会改造の主義にならなければいけないんです。

宗教というものを根幹とした大倭の主義でなければ、世界の本当の平和はこないと言言しうる日が必ず近き将来にあることをここに断言します。だから皆さんにも、そういう自分自身の出来上がり、人間練成、修養のために神様に合掌し、よい信仰心を惜しまないように、強情に続けてほしいと祈ります。

## 法主帰幽祭 ご案内

日時 平成十八年二月九日(木曜日)

●午後一時半より法主様奥津城においてご挨拶のあと、大倉弘さんが主宰される「じよんがら家」(津軽三味線の念)さん六名の奉納演奏が行われます。

●午後二時より大本宮拝殿において帰幽祭をとり行います。

この日をもって法主様が帰幽されて満十年となります。

お蔭様で皆様のご好意、お志により立派な奥津城が完成いたしました。

ありがとうございます。

この日に限らずお好きなきときに大倭紫陽花邑にお出でになって、奥津城の椅子に座り、ゆっくりと法主様と心の対話をされては如何でしょう。

宗教法人 大倭教

年集  
新特

私にとつてのふるさと・・・

(到着順)

私が津軽にいる理由<sup>わけ</sup>

青森県弘前市 田 辺 憲 司

私が青森県の津軽地方（主に弘前市）に居住して、かれこれ十五年が経ちます。生まれは青森県の北端である下北地方ですが、社会人になって新人時代から今の中年時代までお世話になっているのは青森県南西部の津軽地方です。祖先や一族も縁のないこの地は、けっこう居心地がよいので、ついつい長居してしまっているわけなのです。下北と津軽は同じ青森県ですが、距離にしておよそ一五〇km離れ、人々の気質も産業も全く異なります。歴史的には両地方の交流はほとんどありません。気候の違いがそれぞれに分けたのでしょうか。自然の摂理というものはすごいものです。住めば都、いつしか津軽は私のふるさともなりました。

法主様が『ながそねの息吹』において、津軽地方のことに触れられていました。長慶天皇陵のことです。

長慶天皇とは、第九十七代後村上天皇の第一子で、中世の南北朝争乱時に大和の吉野山で生を受け、南朝家の皇位を継承しました。北朝勢力（足利勢）に押され、南朝家の最も低迷した時代に南朝勢力回復に尽くしました。全国各地に行脚の伝説が残され、その生涯は不詳だったため皇統には加えられず、墓陵も不確定だったのです。

明治四十四年に南朝家の正当性が政府に認められ、大正十五年に長慶天皇が第九十八代天皇とし

て皇統に加えられました。

その前年大正十四年二月十五日、法主様のお母様に長慶天皇より霊示があったといわれています。「余八都ヨリ北二降レリ、我ノ御陵ハ、青森ニアリ、霊地」と。明治天皇は「此ノ事ヲ朕二届ケ出ツベシ」と霊示されたそうです。その後、青森県中津軽郡相馬村との御神託で、法主様のお父様が宮内省へ出向いたといえます。これが皇室不敬罪となつて勾留、家宅捜査を受けるなどの災難に遭つてしまいました。法主様十五歳の時だといえます。

長慶天皇伝説の残る相馬村には、天皇を祀る<sup>うまつ</sup>皇堂が、東西に走る岩木川の南方に位置します。そこは「紙漉沢<sup>かみすくさわ</sup>」という地名です。

一方、奈良吉野の吉野神社は東西に走る吉野川の南方に位置します。吉野神社の御祭神は後醍醐天皇、長慶天皇のお祖父様です。吉野国栖地方は紙漉きで有名な小さな観光地。とても強い関係があるのではないのでしょうか。

相馬村の地名に南朝家の縁を見ることができま<sup>す</sup>。「水木在家」という地名は水木氏一族が居住していたという由来があります。その水木氏とは長慶天皇を奉じた北畠氏。「五所」という地名には天皇の御所の意が込められています。「黒滝」という地名は奈良吉野の南方の黒滝村と一致します。

相馬村に隣接する東目屋地区（現弘前市）の地名にも縁を感じます。「高野」という地名は空海の開いた真言宗の総本山、高野山を彷彿させます。南朝は大覚寺統、つまり真言宗の系統で、修験者との結び付きが強く、長慶天皇の行脚各所には修

験者の協力が不可欠でした。「国吉<sup>くによし</sup>」という地名には国栖（くにす）の語音があります。戦国時代は「望石」と称していたようで、「くにす」が「くにし」に転訛した可能性がうかがえます。「吉川」という地名は岩木川を吉野川と見立てたのではないのでしょうか。

岩木川の源は世界自然遺産の白神山地。岩木川は広大な津軽平野を形成しながら安東水軍の拠点であった十三湖へ注ぎます。北畠氏は、その安東一族に保護されて存続したのです。安東氏の祖は平安時代後期の前九年の役で源頼義に滅ぼされた安倍氏といわれます。

歴史という学問だけで片づけられない、時代を超えた不思議な縁に、私も何か関わろうとして、津軽の地にいるのかもしれない。

魂のふるさと？ かな

神奈川県愛甲郡 宗 像 哉嵩子

平成十四年、私が心身共に疲れている時に青森の高橋末子さんが「大倭に行ってみませんか」と、声を掛けて下さいました。大倭の人達は初めて参加した私にも、皆様と同じ様に接して下さいました。また、神宮の暖かく、厳しい、気の空間、その両方の居心地の良さは、なーんとも言えない、心の安らぎを感じました。

むすびの家で法主様のお話を沢山聞かせていただいている内に、いつのまにか絡まった糸が解けるみたいに、心がフワッと軽くなっているのです。大倭は私にとつて、とても不思議な場所です。いつも暖かく、穏やかに接して下さいる大倭の人

達に感謝しております。「ありがとうございます」

また、これからも宜しくお願い致します。

## いんぐう

東京都江戸川区 岡部 宏代

生まれたのは鹿児島県奄美大島で、二、三歳頃に一年位沖縄に住んだらしい。全く記憶はないが南の島の光や風や音色、香り等がとて懐かしい気がする。

五歳位からずっと半世紀、東京を何ヶ所か住み換えている。昔住んでいた所に降り立ってみても、そこはもう昔の場ではなく、全く違う所になっていて、まるで浦島太郎の様な所もある。

昨年十年振り小平の玉川上水を歩いた。昔のままの風景の中に亡くなった主人と植えた沙羅の木が一回り大きくなって、昔住んでいた家の庭に咲いていた。あの頃の私達がその家から出てくるのではないかと不思議な気持ちになった。

自分の手をじっと眺めてみると様々な記憶が立ち昇ってくる。今の私が形成されたかけがえのないふるさととは私自身に内包されている。今まで出会った人々や場や見えない物達等、何と沢山によつて生かされてきたのだろう。その総てが私にとつてのふるさとだ。

そのうち肉体を脱ぎ去り魂のふるさとへ戻つて行くのだろう。

## 私にとつてのふるさと

京都市 池田 宏子

私は大阪生まれの京都育ちですが、青森が私の魂のふるさとです。

二十代の終わりに勤めを辞め、農家の住み込み、水俣を経て、青森にたどり着きました。青森でのスタートは、当時弘前市にあった野草社でした。そこに集う人々、青森の自然にすっかり魅了され、

住み始めることになりました。また、私にとつて青森の象徴が津軽富士とも呼ばれる岩木山でした。

その後、核燃料サイクル施設のある六ヶ所村で、地元の小泉金吾さんのご好意により、約十ヶ月間テント生活を営むことができました。夜明け前の野鳥の大合唱で目を覚まし、寝床を一步出ると、すがすがしい朝の空気をいっぱい味わい、日の出や夕焼けを心行くまで眺める生活でした。

そんな中で、自然の美しさや、自然の恵みの有難さ、そして自分自身も自然の営みの一部分であるという安心感を感じて来しました。また、厳しくもある北国の自然の中で暮らしてらっしゃる方々の大地に根を下ろした生き様や、暖かい心にも魂が揺さぶられて来しました。

街で生まれ育った私に、生きる根つこを授けてもらったように思っています。私が大倭とのご縁を頂いたのが、青森に行つてから、たと言うのもうなずける気がします。

いまでも小さな自分にとらわれて、度々苦しくなつてしましますが、いつも岩木山の堂々とした姿を心に思い描いて暮らしていけたらと思つています。

## 私の故郷

愛媛県新居浜市 大亀 安美

私の故郷……それはやはり心の故郷です。あるいは魂の故郷つて言えばいいのかも知れません。

## 皆、すべての生命が

ひとつであることを知っている

## 自分の現実

自分が創造していることを知っている  
誰もが素晴らしい存在であることを知っている

自然から学び、自然と共生する  
調和と愛と喜びの世界

それが私たちの故郷のように思います。

それはどこか遠くにあるものではなく、一人一人の中にあつて、すべてが完全であることを心からわかつたとき、いま、ここが素晴らしい故郷になるのでは……と思います。

## 故郷

長崎県西海市 津田 恵美子

私は北海道函館の生まれ。あの夜景が美しい街です。函館駅の真ん前で隣はデパートという場所に家はあり、下はお店、二階が住居。数年に一度は次々と隣家を買ひ取つて継ぎたり改築したり、段差だらけで迷路のような家でした。

小学校は生徒数が千八百人のマンモス校。繁華街の裏小路の柳の木の下で鬼ごっこをしてよく遊びました。中学校は、波打ち際にありました。波が朝日でダイヤを散りばめたように輝き、その反射した光がさらに教室の中をきらきらと照らし、私の心をときめかせた思春期でした。

高校は函館山の中腹にありました。特に函館港が一望できる数学の教室は大好きでした。冬には港の向こう側の真つ白な雪に覆われた山から、紺色の海を越えて雪ぐもが雪を降らせながら近づき、いつの間にか窓の外に白い雪がちらつくのです。私の数学の点がどんどん低下した青春時代でした。

ここ十年ほど長崎から函館へ帰省するたびに、駅前付近が寂れてきたのが目につくようになりました。地区の人口減少で母校の小学校は廃校になり、近所の商店街の人達も郊外に住居を構え、夜も住んでいるのはコンビニのお隣さんだけになつ

てしまいました。

最近、姉の仕事場近くの住宅地に新居を建て、身体が悪い母と姉が引越しました。以前の家に六十年ほど暮らした母は、「前の家の方が良かった」と、一年たった今でもブツブツと言います。東京 大倭 長崎と私は移り住み、その間に故郷函館も変わっていききました。でも私を育ててくれた懐かしい思い出の街は、離れて暮らす私を包み込み、やさしい気持ちにさせてくれるのです。

### 私にとつてのふるさと

兵庫 姫路市 岩本 政治

父と弟と一緒にイモの買出しに行つた時などの過去の出来事が脳裏をよぎります。姫路から広島への買出しの時、雪の中、履いていた草鞋の鼻緒が切れ、裸足で宿までの道をやつとの思いで辿り着き、真つ赤になつた足と普段では食べられない白いご飯を食べた時の感激は忘れられない思い出です。幼年時代から青年時代は苦難の時期があり、いつしか幸福な時期が到来するだろうと期待をしながら生きて来ましたが、その道程は大変厳しいものがありました。

そんな中で両親はひたすら先の見えない希望を追求しながら、懸命に私達を育ててくれた事が心に残っています。親の背中を見ながら、いつしか両親に榮をさせてあげたいと一心に思い描き、自分自身の自立を模索し頑張つて来ました。まあしかし、思うようにいかないのが人生で、今となつては、この苦勞が私にとつては懐かしく新鮮で、ふるさとのように思えております。

ssssssssss

今回「ふるさと」へ、それぞれの思いや気持ちで語って頂けたことに感慨無量です。ご協力頂いた皆様に厚くお礼申し上げます。(編集部)

## 逍遙遊を求めて……

ことば  
言霊の巻

表題の、○○の巻というところを自分の関心のあるテーマで自由に書いてほしいとのこと。

その頃、何だかわからない不安と自己嫌悪に、正直それどころではない自分を見つめていた。

「逍遙遊」とは程遠いところにいる。何も思いつかない。年末の忙しさで何とか自分の気持ちを紛らわし、それでも時々襲つてくる感情と戦いながら、出口を求めて彷徨つている状態が続いた。

「また同じようなことで悩んでいるぞ。何事も禊だと思えば乗り切れると思つたんじゃないのか?」と心の中で叫んでいる。そして狂おしいほどに「大倭、大倭、大倭」と繰り返している。

「真の平和社会を祈る者は、まず『みそぎ』によつて自己本霊の浄化に努め、音高々に拍手を打ちながら『奈母太加天腹』の言霊を大宇宙に向かって高唱することが望ましい。」(やわらぎの黙示一七八頁より)という言葉を思い出し、誰にも聞かれない車の中で高唱してみたりする。声を出しながら、大倭紫陽花邑や大倭神宮以外の場所では心の中でしか唱えていなかつたと気づかされた。それから「神のまにまに」を開いて、声に出して読んでみた。まえがきの「いうまでもなく宗教は生活の中になければならない。」という言葉があらためて心に響いてきた。

「大倭信人日々のおこない」を読む。宗教心成形にあらわし日々の行いの基としているとある。起床時から就寝時までの心がけがシンプルだが事細かに書かれてある。挨拶や掃除、拝み合う心、そして感謝の心が説かれている。

「さて、自分には出来るだろうか?」と自

逍遙遊とは、何ものにも束縛されることのない絶対に自由な人間の生活という意味(莊子より)

京都府舞鶴市 藤本 宏秋

問自答してみる。実践出来ていることと出来ていないことがある。感謝の心は持つていているつもりだが、そういえば声に出していない。

ふと、「行、学の二道を励め。」(やわらぎの黙示二二〇頁より)という日蓮の言葉を思い出す。そして続けざまに鈴木母さんの「論語読みの論語知らず」という口癖が去来する。「ああ、そうだ。自己嫌悪の原因はこれだなあ。自分に欠けているのは形にあらわすことなんだ」と気づかされた。そうとわかれば実践あるのみ。でも凡夫な自分はその気づきをすぐに忘れてしまう。何かもうひとつ物足りない。

そんな時、法主さんからお聞きした「お祭り」の意味「神意にまつろふこと」を思い出した。日々の暮らしをお祭りにしてしまおうと思った。大倭へ足を運ぶことが出来なくても、霊界は融通無碍の世界(だと思つている)だから、通じるはず? その日から、新しい習慣を暮らしに取り入れた。朝の出勤時、車の中で「黎明大倭」を歌い「奈母太加天腹」を高唱し、大倭信人としての使命を再確認。そして、深夜の帰宅時には、車の中で「くにもと」を歌い「奈母太加天腹」を高唱し、大倭とご縁をいたただけたことに感謝。そして帰宅すると、玄関で一日の無事に「ありがとうございませ」を静かに(家族は就寝中なので)唱えます。

私にとつての実践の第一歩は言霊を声に出すことです。まるで禊のようになりましたが、こうして文章という形にあらわせる機会をいただき感謝いたします。ありがとうございます。拍手合掌

# A W T C 日誌

12月11日 午前8時より大倭墓地の大掃除。続いて第4・45回禊会をかねて大倭紫陽花邑の年末大掃除が行われました。

沖繩の比嘉良丸さんら11人が来邑されました。

12月15日 大倭神宮月次祭。

12月17日 大倭病院の設立時に植えられた樹が建物を覆うほどになったので剪定のため松本元嗣院長は、大倭病院守護神である東山坊大善神に挨拶されました。

杉本順一さんによれば、東山坊さんは「ココロエタ」「キメコマカナ シゴトライタセ」と言われていたとの事でした。

12月22日 朝から吹き降りの雪が積もり、奥津城除幕式リハールは中止となりましたが、昼

前には止み、有志の皆さんで日聖祭の準備。邑内各所に門松も整えられました。

12月23日 風はきついが昨日とはうって変わって晴天の下、午前9時40分から法主様の奥津城の碑、墓誌の碑の完成除幕式が行われました。

10時30分から大本宮拝殿において日聖祭が行われました。

午後1時からは長曾根寮あじさい広場で直会演芸会が開かれました。

夜、大倭会館でこの日の裏方さん達が打ち上げをしました

12月25日 午前9時過ぎから大倭神宮の大掃除が大倭会と邑の有志によって行われました。杉本順一さんの話「作業前の挨拶の時、外陣にいた数人の者に『ナカニハイレ』と法主さんの声、作業が終われば『キヨモノシオロマケ』との事。何気ない作業にも、忘れてはいけない『心得ごと』があるものだ」と改めて教えて頂いた気がしました。

12月27・30日 交流の家でF I W C 関西の年末キャンプ。九州

や広島島の委員会からも大勢が参加しました。29日夜には、関東

委員会の中国駐在員、原田僚太郎さんと蔡潔珊さんの結婚を皆で祝いました。

12月28日 昇ちゃん、夕方大倭印刷の仕事納めの打ち上げに

混せてもらった後、夜行バスで帰省しました。横須賀の弟さん

宅へ1月4日まで。

12月30日 恒例の餅つき神事が行われました。今年もF I W C

の若者達がたくさん参加、白と杵を使ってお餅搗きは珍しく楽しんでくれたようです。

12月31日 夜11時40分、1年365日の祓い清めのため拝殿の大太鼓が若い人達によって打ち

鳴らされました。ちょうど12時に365回目を打ち終わると、

すがすがしく「新年明けましておめでとうございませう」とお互い言葉を交わし、祭壇に向かって神さんに挨拶しました。

1月1日 温かい晴れた日となりました。午後1時より法主奥津城、大倭紫陽花邑の守護霊三

神にご挨拶。2時より大倭神宮で年始祭が行われました。

1月5日 午前11時より拝殿において、大倭殖産、大倭印刷、

大倭安宿苑、大倭大本宮の関係者が初出の挨拶を行いました。

1月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館において、邑人

達の新年会が開かれました。

1月8日 禊会。新年に当たり各人の思いを語り合いました。

その後5時半から教務本庁で勉強会。今年「法主寸言」を

テーマに勉強するそうです。

1月9日 西の齋庭において午前9時頃から、門松、注連縄、

大倭神宮の古竹などを火に上げる「大とんど」が行われました。

有志のご好意による、ぜんざい

や大根炊きもふるまわれました。

## 大倭安宿苑では

12月17日 奈良パークホテルで、約150名の職員が一堂に会し年末懇親会を行いました。

(菅原園)

12月19日 京都に木下サーカスを見に行きました。

(須加宮寮)

12月7日 奈良県文化会館へ心身障害者作品展の見学に。

(長曾根寮)

12月23日 懐かしの歌で直会演芸会出演、出演者顔負けの女装の司会者からインタビュー。

# A T M i C

\* 玉緒祭(大本宮)

2月3日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じてお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。

\* 月次祭(大倭神宮)

2月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 法主帰幽祭

2月9日(木) 午後1時半より奥津城と拝殿にて。4頁参照。

\* 大倭会主催第四四七回禊会

2月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\* 月次祭(大倭神宮)

2月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 申孝祭と月次祭(大本宮)

2月23日(木) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭について詳しくは、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流—長曾根邑のすめらみこと」や『おおやまと』の平成元年3月号等を読みたい。

神武天皇が即位四年後、大倭神宮のある場所を「大孝を申べ」

られた故事を記念して、大倭教では報恩感謝のお祭りとされている。大倭神宮には「金鶏靈時

鳥見山中聖蹟」の碑がある。

**年賀状より**  
紫陽花邑ご一同様へ

奈良県平群町 山上 憲一

この一年もたくさんお世話になりました。今年もよろしくお願いいたします。お正月は、お正月の行事を楽しみたいと思います。お正月は、お正月の行事を楽しみたいと思います。

